

自選

五十首

坂井修一



さかい・しゅういち 一九五八年、愛媛県松山市生まれ。東京大学大学院博士課程修了。工学博士。現在、東京大学教授（情報理工学）。作歌は一九七八年「かりん」入会と同時に始める。現代歌人協会賞、寺山修司短歌賞受賞。引用の歌集のほか、「鑑賞現代短歌・塚本邦雄」。

雪でみがく窓 その部屋のみどりからイエスは離りニイチエは離る

『ラビュリントスの日々』

青乙女なぜなぜ青いぼうぼうと息ふきかけて春菊を食ふ

籠に飼へぬ頼家蝨と吾がことを呼びし母はや呼ばぬ父はや

追ひつけぬ予感か春の九十九折り先に林檎を食む人きみは

水族館アカリウムにタカアシガニを見てゐるしはいつか誰かの子を生む器うつは

揺れ揺るる梓川こそさびしけれどこへ行くとも夏の果てなり

見上ぐれば狂ふれよとばかり山澄みていやおうも無しわれは立たさる

生きいそぐ一語はげしきラボの椅子喜連川博士きつれがはわれを非難す

目にせまる一山の雨直すくなれば父は王将を動かしはじむ

背ぬくきあづまをとめは物言はずはこべら持ちて遊ぶなりけり

二つ三つかみそりの傷ほの紅あかきわれはしづかな破戒僧なり

霧島はひかりの花を落すとぞひた落すとぞさらばファウスト

科学者も科学も人をほろぼさぬ十九世紀をわが嘲笑す

うちいでて鶴鶴あをし草深野一万人の博士散歩す

クロインのそのクロインの女なる去年こぞのこよひのぶらぶらの花

おほいなる無価値こそ人を病ましむやオホーツクオホーツクわれは地をゆく

アルキメデス殺ころしの紅顔兵卒もわれも沈丁の香にまみれをり

無人戦車無人地球の街を野をはたはたと晒あふごとくゆきかふ

貌を喰ふメタ・貌のごとはろばると群青天下しづかなりけり

名にし負ふ極楽鳥花妻は愛めづあはれとばざる種をのこすもの

舟虫はがねの綱はがねの胸があゆみをりそのしづごころほろぼしがたし

あわだちて物質主義マテリアリズムの淵まにゐるたましひのこといかに記さむ

語るなくしやべり命なくながらふる黄金世紀が扉ドをたたくぞ

大量虐殺せよせよと二十世紀ありフォン・ブラウンありわれら末裔

縄文の子らをあらひし千粒の雨をおもへり子の傘かさに雨

WWウエップのかなたぐんぐん朝はきて無量大数の脳が脳呼ぶ

英雄の尿いばりのごとくかがやくは天網かたはたインターネット

ニュートリノ地球貫通せよ われに花も紅葉もふるさともなし

川よわが時間のごとし おもふことかなはねば焚く芝草の土手

菊きくに立つほのほは直なく立つものを秋空よわれはほほゑみをらむ

「群青僧」

「スピリチュアル」

「ジャックの種子」

私の家の近くには、利根川、鬼怒川、小貝川こがねがわの三本が流れている。利根川の悠然とした流れは言うまでもないが、あと二本もそれぞれに面白く、眺めるだけで些事さしを忘れさせてくれる。

鬼怒川は、栃木県の奥地（塩谷郡栗山村）に源流があり、鬼怒川温泉を通り、宇都宮・真岡・結城・石下・水海道などの町を潤した後、拙宅から遠くないところで利根川に合流する。合流点は常磐高速道からも見える。

この合流点のあたりで、ときに小舟を出して魚釣りをする人を見かける。夕暮れどきなど、これは絵として上等なものとなる。川とか空とかいう景がとて大きく、舟も人も、太古以来の姿に見えて、命の営みに二義的なものはなにもない。関東平野というより、中国の田舎といったほうが当たっている。

鬼怒川は護岸工事をあまりしない川の

いつまでも拙速の蟻見えながらアカデミアよわが混沌ケイオスの庭

鐘樓やそのかみひとは髪ほどき愛よりも濃き日々へさそひき

われとひとと声あげず消す野火のうへけふの鳥みなあをくとびかふ

ゆふもやのほころびを出づる虹見えて球場の声はるけくなりぬ

DNAかつら葛なしつつなだるといまかぎりなき少年少女

ニューロンの樹状突起がうちふしてまたたちあがるためらひは見よ

子は蒔けりジャックの種子を われはもう見守りもせぬはつなつの部屋

石、花のごとく崩れて誰かとなふ殷・周・秦・漢ほろべほろべと

関八州悪党となり駆けめぐる 科学とはいはばさういふところ

鮫鱈の吊らるる待ちて火をたけばああわれはただ夕闇ゆふの澱

ゆふつ野にかりがねは春のはばたきすああいくつある心のつばさ

春の寺ものおもふこと飛ぶごとくわが打つ鐘はなりわたりゆく

人參のつぼみのなかのしろき花ほのぼのと子は黙しつづけぬ

かりがねは宇宙の大悲知るべしとホームレスいへりあらくさの中

人類の加速度を空は背うへはずさらさらと蜻蛉せうてい浮かべて暮れぬ

オゾンホール杞憂のごとくはるかなりゆふぐれに会ふ吾子ときつねと

コンピュータな作すこと丹頂あゆむことおもへば同じ 長靴に泥

ここにゐる螢は平家のみといふあしたひかれりうつし世の平家

妻よ子よわれらは蝦夷の蟬となりここに暮らさむ白ひふかき陽ひよ

シユメールの昔より王は火をあたへ水をうばひき砂漠の民の

〔牧神〕

ようだ。岸には荒々しい石が転がり、木や雑草が鬱蒼うっそうと茂っている。カヌーなどをして楽しむ人もいるが、ふだんはただ水の流れが見えるだけである。岸近い林で、カプトムシやクワガタムシ、タマムシに出合うこともある。

いっぽうの小貝川の源流は、同じ栃木県的那須郡南那須町の小貝が池である。下館しもたね・下妻しもつま・水海道などの稲作地帯を潤した後、藤代ふじしろ（取手市）で利根川と合流する。合流点は柳田国男が少年時代を過ごした場所で、柳田は後に小貝川源流の旅をすることになる。

鬼怒川と違って小貝川は急流をもたない平野の川で、ふだんはおっとりとした姿をしている。国道二九四号線沿いには、この川の静かな流れを楽しめる場所がいくつもある。ただし、大雨となると鬼怒川よりずつとたちがわるい。常総地方の歴史は洪水との戦いの歴史である。私のような新参者でも、通勤の自家用車が立ち往生した経験をもつ。

毎日東京に通っていても、散歩やドライブで三本の川を眺め、あれこれ想像するのは楽しい。今は、河川敷のグラウンドで野球やサッカーに興じる季節である。